

Jマテ通信



発行 Jマテ・ホールディングス株式会社
〒942-0253 新潟県上越市大字下名柄1618-1
<http://www.joemate.co.jp/>



2020.7 Summer Jマテ・グループ創業70周年特集／うみらいず・ブレッソ直江津

70th Anniversary

創業記念日の6月25日、Jマテ・グループは今年で70周年を迎えました。これまでの歩みについて山本秀樹社長に歴史を紐解いていただきました。



70周年を迎えて ～創業からの軌跡～

Jマテ・ホールディングス株式会社
代表取締役社長 山本 秀樹

鉄屑を売買していた戦後の創業期

今から70年前、戦後の混乱がようやく収まりつつある1950年6月、私はこの世に生を受けました。何の因果か、私の誕生日は朝鮮動乱勃発の日です。当時、先代である父(山本 耕作)は既に鉄屑・銅屑の商いをしておりましたので、当然相場が急騰し大儲けをしたわけです。そのような状況下でしたので創業日を私の誕生日としたものと思われます。

私が幼稚園の頃、父は高田に事務所を構えておりました。今はもうありませんが、「とんかつ大矢」のあった場所にビリヤード場があり、その一角が事務所でした。業としては地元の大手企業である柿崎の理研製鋼、信越化学、日本曹達から鉄屑の払い下げを購入し、それを貨車で神戸製鋼に送っていたようです。



初代社長
山本 耕作氏



当時の高田事務所付近(現在の上越市大町4丁目)

JCP・JEVの事業の基礎となる

銅合金地金の製造と環境ビジネスを開始

1956年、法人化し(株)山本商店に商号変更。時同じく上越市東本町にヤードを構えて事業拡大し、1960年の山本産業に商号変更。その地で1966年に銅合金地金の製造を開始しました。それが現在のJマテ・カッププロダクツ(JCP)の原型となる事業の始まりでもあります。その2年後には、東本町のヤードが手狭になり、木田の地に大きな工場を建設し移転しました。正にとん拍子の事業拡大で、銅合金の生産量が飛躍的に増大し、あわせ鉄くずの商い量も大幅に増加しました。

しかしながら相場変動を伴う商売ですから、1958年のスターリン暴落で大きな損を出し、その

後も随分起伏の激しい経営をしていたとも聞きます。とはいえ、時は高度成長期(1955～1973年)。20年余りの期間に10%以上の経済成長があった時代です。経営者にとっては天国の様な時代だったようで、父もかなり鼻息が荒かったと記憶しています。

そのような経済環境下、先代が先を見越して環境ビジネスに着手しました。一般廃棄物処理業の上越市長許可を取得したのが、およそ40年前の1980年になります。その環境事業が現 上越マテリアル(JEV)の主力の業務に繋がっていくわけです。

その後1982年に北陸自動車道建設の為、非鉄部門だけ大潟土底浜に移転となります。近代的な工場で生産量も大幅に拡大。地金業界では大手と言われる存在にまでなりました。



山本産業株式会社 本社・製鋼製紙工場(木田)



1973年に購入し、現在はJCP産機工場で大形遠心鋳造品(船尾管のシール部品)の加工を行うターニングマシン

上越合金工業が連続鋳造を開始

山本産業と合併して上越マテリアルが誕生

その翌年(1983年)、私が付加価値の高い分野を目指すべく連続鋳造品の製造販売を目的とした上越合金工業を設立し、現テクノセンター内の工場にて事業を開始します。

上越合金工業の業容については、全く新しい事業への進出であり、苦しい試行錯誤の連続でした。全社員の頑張りで良い製品が作れるようになるまで2～3年の歳月を要し、事業が軌道に乗った時にバブルが始まりました。(1986年～1991年)時代の流れが助けとなり、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いと言われたほどに急成長したのです。

しかし、1991年にそのバブルは弾けました。それからの2～3年は凄まじいほどの景気の急落に翻弄され、追い打ちをかけるように提携していた中越合金と敵対関係になったことで、非常に厳しい経営環境におかれることとなりました。バブル崩壊後、経済の低迷は20年も続きました。その期間は失われた20年と言われています。

山本産業でも同じようにバブルの後遺症に悩まされる状況下にあったため、両社が合併することで難局を乗り切る方向に舵を切りました。1993年、山



JEV二本木工作部の1972年製のポンチングマシン(型钢・鉄板の穴あけ機)

本産業と上越合金は対等合併し上越マテリアル(株)が設立されました。

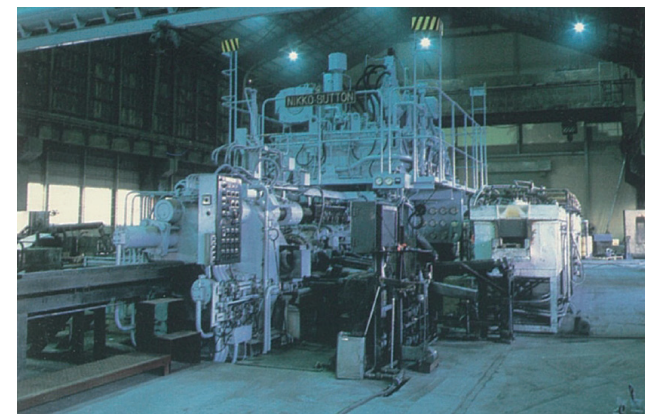
グループ経営体制と事業拡大への模索

合併後は、バブル崩壊後の経済環境ながらも、会社の経営は順調に推移していました。

2002年、安価な労務費で製造可能な中国に工場を造ることとなりました(SCP)。

また、会社を分社化したのもその頃です。ホールディング会社(JHD)の下に100%子会社としてJCP・JEV・JLC(Jマテ、ランドコム)・JEG(Jマテ、エンジニアリング)を設立し、子会社の社長に権限を持たせ、それぞれが経営をするシステムを導入し、早い経営判断が出来る様にしました。そのシステムが業績の向上に繋がり、現在も継続しています。

2007年、上越でも本格的に解体業務を始める為、ノウハウを持つ長野県茅野市の信濃環境整備



上越合金工業株式会社(化成直江津工場内)



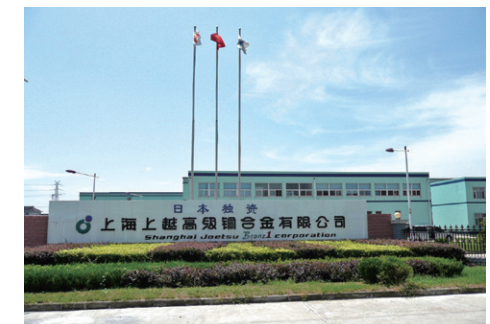
Jマテ、ホールディングス株式会社・上越マテリアル株式会社の現社屋

(SKS)を買収しました。現在はJEVの解体事業は上越の地でNo.1になったと自負しております。

2008年秋にJHDとJEVの本社と工場が総設備費30億円をかけて完成しました。

さらに同年バイオマス事業(JBC)を拡大すべく、五貫野の地にこれも30億円をかけて工場を建設しました。皮肉なことに、その2工場が完成した時にリーマンショックが起きました。青天の霹靂とでも言いましょうか、順調が故に事業拡大を模索した矢先の出来事で、一気に奈落の底に突き落とされることとなったのです。その時の連結損益は30億円の経常損失という膨大な金額でありましたから、倒産しても不思議ではない状況にまでなっていたと思います。

リーマンショックからはV字回復する様な経済環境であった為、全社一丸の頑張りもあり、徐々に30億円の損失の穴埋めも出来ました。本当に皆さんに感謝したいと思います。



上海上越高級銅合金有限公司(SCP)



木田の上越マテリアル跡地は現在ホワイトウェーブとして活用

事業の整理やトヨタ生産方式の導入など 近年は経営の効率化を第一に

2015年には、中国で環境に関する法律の規制が厳しくなり、スクラップを使っの製造が難しくなったことと労務費が急激に上昇したこともあり、SCP撤退を決断しました。同じく中国進出をしていた日本企業が撤退に苦慮する中で、早期の判断が功を奏しスムーズに撤退することができました。スムーズな撤退に加えて、中国の地価上昇に起因することとはいえ、工場が高く売れ、損失を出さずに済んだことは奇跡とも言われたくらいです。

その頃から国内事業の見直しも行いました。創業以来行ってきた鉄屑の問屋商売を止めることを決断しました。創業の商売ということで、止めるに際しては少なからず一抹の寂しさを感じ躊躇する気持ちもありましたが、安定した収益が確保できない状況にもなりましたので、将来を見越し断腸の思いでの決断でありました。以後は環境ビジネスと解体を主力としてJEVを経営していくことになりました。

JCPにおいても業務の見直しを進めました。地金の生産量を大幅に減らし始めました。地金に関しても社歴の中では長い商いでしたので、大幅減産には辛いものがありましたが、需要が減る状況では減産せざるを得ないという結論に至り、結果的にピーク時の1/5まで縮小することにしました。

また、生産の効率化を求めて、トヨタ生産方式(カンバン)を導入(2017年)。生産の無理無駄の削減で経営の効率化を始めました。3年ほど経過する段階ではありますが、目に見えてその効果が出てきております。在庫の大幅圧縮。小ロットをタイムリーに生産し需要家に早い納期で納められるようになりました。今後も更に推し進めていきたいと思ひます。

70周年を迎えた今、想うこと

最近では、JLCの不動産事業が地域に根を張っていることを実感されている方も多いと思います。今年、直江津駅前にマンションを建設し販売を開始しました。直江津の地ではランドマーク的な存在

にもなっており、JLCの知名度を一気に上げたと思ひます。上越市を代表するディベロッパーといっても過言ではありません。

70年の歴史の中では、多くの苦難を乗り越えてきたことをあらためて思い起こされます。しかし、それよりも、地元で生まれた小さな商店が、今や地域社会に根差した企業に成長したことが大きな喜びでもあります。

2020年、世界は新型コロナウイルス感染症に翻弄されています。今まで経験したことのない状況下で、これから経済がどうなっていくのか、今までの経験がどのように生かされるのか未知数といえます。ただ言えることは、その時々判断を的確に、柔軟に対応できる力を持つていくことが肝要だということです。

これからも、地域社会に貢献する企業としての誇りを持ち、発展し続ける企業を目指します。



直江津駅前の複合マンション
「うみらいず・プレzzo直江津」

創業70周年に寄せて

Jマテ. グループ創業70周年おめでとうございます。

私は、1979年(昭和54年)4月、当時の山本産業(株)製鋼製紙原料部に入社しました。入社42年目、70年の歴史の6割に当たることになり、自身としても感慨無量です。入社時の会社の場所はホワイトウェーブのある木田にあり、現在のJCP、JEGと同一敷地内にまとまっていた。その後、北陸自動車道が会社敷地内を通ることになり、JCP、JEGは現在のところに移転、1983年JEVは残った土地に新工場を建設することになりました。私は、この新工場建設プロジェクトに参画することとなり、いろいろ勉強させていただきました。同時期に、新潟事業所

山本産業(株)、信越情報システム(株)、上越マテリアル(株)、Jマテ.ディベロップ(株)、Jマテ.ランドコム(株) これは私が入社以来、所属した会社です。

私は1982年(昭和57年)4月、山本産業(株)に入社し非鉄金属事業本部(今のJCP)小口仕入れの部署に配属されました。そのわずか4ヶ月後、信越情報システム(株)設立に伴い出向を命ぜられ、コンピュータ機器の販売を担当しました。1年後に出向を解かれ経

の新規開設もあり大変でした。このプロジェクトをスタートに、以後、新規事業それに伴う工場建設など、大きなプロジェクトを経験させていただきました。主なものは次の通りです。

2004年 吉川RPF工場

2008年 JBCバイオマス変換施設

2008年 JEV移転、新工場

これらの工場建設は廃棄物を扱うため法律に則り、近隣住民の皆さんに事業内容を説明し、承諾を得ないと建設できないため、住民説明が大変でした。住民の皆さんからは「廃棄物を処理するために必要な施設なのは分かるが、どうしてこの場所に建設するんだ」といった“迷惑施設は反対”の厳しい意見も多く、大変苦労しま

営管理本部経理課に配属となりました。そして、1985年春に宅地建物取引主任の資格取得を命ぜられ、運よくその年の秋に資格を取得しました。その後、引き続き経理の業務をしていましたが、1988年3月、今度は宮城県志津川町(今の南三陸町)にある信越情報システム(株)の関連事業所への転勤を命ぜられ1年間の単身赴任をしました。この時は、倒産した事業所の整理等が主な仕事でしたので、全く知識も

上越マテリアル株式会社

代表取締役社長 小池 作之



した。今では、工場の地元町内や近隣から当社に勤務されている方もいるなど、地元町内とはトラブルなく良好な関係となっています。

また、2008年のJBC建設、JEV移転は、大恐慌以来の経済危機ともいわれたリーマンショックの年で大変厳しいスタートとなりましたが、この難局を乗り越えることができましたのも、山本会長のもと、多くの皆さんのご協力のお蔭と感謝しております。

今、大きな案件を検討していますが、これが私の最後のプロジェクトであると決めています。成功に向け頑張りますので、ご協力よろしくお祈ひします。

Jマテ. ランドコム株式会社

代表取締役社長 関原 伸一郎



経験もない仕事ばかりで相談者も身近におらず大変でした。

その後、不動産業務に就くこととなったわけですが、時代はバブル。自分の経験や実力不足とは裏腹に案件が次々とまとまり、有頂天になった時期もありました。しかし、良いことはそんなに続きません。バブル崩壊後はなかなか案件もまとまらず苦労の連続でした。その後、上越マテリアル(株)、Jマテ.ディベロップ(株)、Jマテ.ランド

コム(株)と所属は変わりますが、ずっと不動産の仕事を続けています。

私が入社直後の約10年間はさまざまな業務に就き、成功も失敗もありました。その中で創業者の山本耕作氏から言われたのが「事業の成否は9割が運、しかしあとの1割をいかに努力す

るかが大切だ」と。そして、失敗したときも「いいってことよ。次頑張れ」と言われ、救われた思いをしたこともあります。

入社以来38年、会社内外でかわりを持たせていただいた方々に感謝するとともに、これからもJマテグループ

が発展していくことを願い、そしてその一助となるよう微力ながら社員と共に努力していくつもりです。

大変雑ぱくで稚拙ではありますが、以上をもちましてお祝いの言葉とさせていただきます。



Jマテ エンジニアリング株式会社
代表取締役社長 岡田 顕彦

創業70周年おめでとうございます。

私は1979年(昭和54年)4月に、当時の山本産業(株)機械製作部に入社しました。長いようで、過ぎてしまえば矢の如し、でしょうか。当時はポンプのケーシングの加工などの下請けを行っていました。私が入社した年に新潟鐵工所から、原油の掘削設備(リグ)のドロワークスと呼ばれる強力な巻き上げ装置の中で使用されるフック&ブロックというユニットの加工と組み立てを受注し、その作業に1年程携わりました。射出成型機の型締め部の組立も同時期に行っていたと記憶しています。当時、会社は木田にありましたが、私は組立作業現場である現在の産機工場に勤務しました。周辺は高速道路も建設前で松林の中にボツンと存在しているような状況で、工場の中にウ

サギや蛇が入ってきて驚いたことを覚えています。広い工場に4~5名と少ない人数だったので、昼休みに蛇を焼いて食べる人もいておおらかな時代だったようです。

その後しばらくして、当時取引のあった富山の不二越(NACHI)から設計の応援依頼があり、希望して2年近くブローチ盤の設計に関わる貴重な経験をしました。当時の製図作業は未だドラフターの時代でした。描いては消し、描いては消しの連続で、鉛筆と消しゴムの消費量は大変なものでした。忙しい時はフリーハンドで作図することも結構ありました。

富山から帰ってから機械製作部で金型の設計製作をすることになり、数年間、金型設計に関わりました。納期が迫ると設計も現場も徹夜が当たり前の

ような世界で、夜食を食べながら仕事をしていたことを思い出します。

1984年、信越エンジニアリングの専務・澤田さんが役員として機械製作部に入社された関係で信越グループの新潟ポリマー(株)と取引開始。射出成形品の切断機を納入し、その後、信越化学グループとの取引が徐々に拡大。シリコンウェーハ製造の主に前工程であるラップ盤関係の修理・改造・新規製作を行う中で客先と共同でラップ定盤自動溝掃除機を開発し、これは信越化学グループに広く水平展開することができました。

今後も提案営業や自社商品開発を推進し、業績の安定化を図り、グループの一員として欠かせない存在となるよう努力しますので、皆様の御協力をお願い致します。



Jマテグループのロゴの意味

アルファベットの『J』を象るとともに、右上の青い丸が地球を表し、左下の円によって「資源を地球に戻す」という姿を描いています。「循環型社会の責任ある担い手として、限られた資源の有効活用を通じ、持続可能な社会の実現に貢献する」という企業理念とも一致しています。